版検晃全撰『僧譜冠字韻類』
所載の『道元伝』考

吉田 道興

『僧譜冠字韻類』は、善房宗の版検晃全（二二三五九三）が江戸高輪の豊岳寺に在住中の延宝四年（一六七六八五）の間に中京の高僧を中心にして広大な編集の数年間を費やして編纂したもの。索引の機能を持ち冠字の韻により排列し利用の便を図っている。文全は、武蔵龍樹寺より貞享五年（二六八年七月に台命を受け永平寺に昇住し、同年九月三月に元禄元年と改号）十二月上旬、京都寺町三条下の中村五兵衛に開版させた。略伝には九人の日本僧（雲海、南浦、貞慶、道元、夢窓、蘭渓、俊円）、覚阿が含まれ、巻八三末尾に「道元（以下「道元章」と称す）が載っている。

本書は熊谷忠興氏の論稿「三回忌を迎えた完全禅師」（二三）『僧譜冠字韻類』百冊と五十巻を総目次八冊に、『僧譜冠字韻類』百冊・百五十巻に総目次八冊に、『僧譜冠字韻類』百冊と五十巻の総目次八冊を試みた。

管見によれば『僧譜冠字韻類』の所蔵先は、次のとおりである。記事内容と印刻の状態から『初版本』と『二二二二』をもとの『増補本』と『再版本』と『東本』（次巻）の区別をしておきたい。

①立新国会図書館所蔵本

本文四九巻（次巻）二二二二。茶表紙27.4×18.1cm。
三月十四日の「入内参内」記事があり、「初版本」後に編纂されたことが明確である。注意すべきは、その刊記「初元十五世紀特撰応安禅師晃全版槇野水禅師行記」という文句が、もとより大谷大学・竜谷大学・高野山金剛寺の「伝記」を示しているという点である。

① は、元禄元年の「初元十五世紀」である。本文の前半に述べる内容は、元禄時代の戦乱により、永平寺の仏像が破壊された結果、永平寺の「初元十五世紀」作成の動機について述べている。

② は、後の書記にも「大乗常住」の印が押され、元禄時代の永平寺に余る手段としての役割を果たしていた。加賀大乗寺に所蔵されていたもので、寄贈しないと賃金等の事情でいつの頃からか不明である。巻一五〇は欠けてている。

③ は、同じく「初元十五世紀」とみなされる。別冊の「総目録」の中、冒頭の「別をもつ」としては、彼方の永平寺に所蔵されている。「総目録」の末には「僧詣表文と見られ、永平寺の仏像が破壊された結果、永平寺の「初元十五世紀」作成の動機について述べている。

④ は、元禄元年の「初元十五世紀」である。本文の前半に述べる内容は、元禄時代の戦乱により、永平寺の仏像が破壊された結果、永平寺の「初元十五世紀」作成の動機について述べている。

⑤ は、元禄元年の「初元十五世紀」である。本文の前半に述べる内容は、元禄時代の戦乱により、永平寺の仏像が破壊された結果、永平寺の「初元十五世紀」作成の動機について述べている。

⑥ は、元禄元年の「初元十五世紀」である。本文の前半に述べる内容は、元禄時代の戦乱により、永平寺の仏像が破壊された結果、永平寺の「初元十五世紀」作成の動機について述べている。
このページの図書を読みやすくするためのテキストは含まれていません。
道元の母を「藤原」基房公之女」とする初出資料も上記の『道元伝』考（吉田）所載の「道元伝」「僧議冠記音類」所載の「道元伝」
三、『延宝本建撕記』との比較対照

熊谷氏は、前揭論稿中『道元章』に関して『延宝本の建撕記』に近いといえる。しかし、細部を検するならば延宝禅師の主眼を立たせたと言える面も多いと述べている。

紙幅上、それらの全てを列挙し論ずることはできない。ま

で、沈黙を守る一法の論戦がナレッジを築き上げるとの所感をしたかった、この時、僧の『老瑞』に偶然出会い、評判の高い如浄和尚への参問を進める場面である。既に同様の記事は、『道元和尚行記』『列祖行業記』『記年録』等に現れる。しか

は、延宝建撕記が他本より明らかに近く、これを元に完全に案策したと思われる。
contemporary literary works and Buddhist sermons.

In Shinran’s usage, expressions with “togu” tend to be related to the Primal Vow and the Other Power of Amida Buddha. Especially relevant is the phrase “Kasui no Gan” and in comparison with the “ōjō wo togu” in the Tannishō we may place an example in the Yuishinsho-Mon’i.

In conclusion, strongly related with expression of “ōjō wo togu” is the term “eshin” is used in Chapter III. This expresses the character of this chapter. This chapter is able to express the overall structure of the salvific capacity of the Pure Land teaching, grounded in the Primal Vow, in common with Shinran’s expression.

143. The “Life of Dōgen” published in the Sofukanji inrui or Genealogy of Zen Monks Classified by the Sound of the First Chinese Character of Each Name edited by Hangyō Kōzen

Michioki YOSHIDA

Hangyō Kōzen (1625–93) was the thirty-fifth abbot of Eiheiji Monastery. He edited and published the Sofukanji inrui or Genealogy of Zen Monks Classified by the Sound of the First Chinese Character of Each Name comprising 150 volumes (100 books) when he was the chief priest of Takanawa Sengakuji Temple in Edo for ten years. The genealogy included about five hundred Chinese Zen monks who were classified by the sound of the first Chinese character of each name. These biographies were collected by using 162 old and valuable materials. Volume 88 contains a “Life of Zen Master Dōgen,” the founder of Japanese Sōtō Zen. But no one has noticed this “Life of Dōgen” in the Sofukanji inrui until now.

In this “Life of Dōgen” his father is stated to have been Koga Michichika, his mother to have been the daughter of Fujiwara Motofusa and his uncle on his mother’s side to have been Ryōkan, the eighth son of Fujiwara Motofusa. This article examines these materials.